1984年12月5日発行(毎月1回5日発行) 1984年2月10日第三種郵便物認可 ISSN 0286 4479

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

ポーランド月報

1984年
12月号
(通巻33号)
400円

⊗⊗ポーランド月報　1984年12月号目次⊗⊗

ポピエウシコ神父誘拐殺害事件
事件の経過 …… 2
イエジ・ポピエウシコ神父 …… 3
声明 「連帯」在外調整局／「連帯」暫定調整委員会／キシチャク内相…… 4
真実　勇気 「連帯」 …… 6
——ポピエウシコ神父の説教から
恩赦後——指導者は語る
大衆に活気を与えるプログラムを …… 8
J・ルレフスキ
職場活動の強化を　Z・ブヤク …… 11
反対派の政治地図 …… 14
新語法の手引き——支配者用語の基礎知識
1 （あ～き） …… 16
ソ連邦内の少数民族 …… 18
国家廃絶への道——「連帯」が示すもの
井汲　卓— …… 20
作ってみませんか　ポーランド料理 …… 22
ポーランド日誌　1984年10月5日～31日 …… 23

ポピエウシコ神父誘拐殺害事件の経過

10月19日　午後10時頃、ワルシャワ北西210kmのトルン近郊の路上でイエジ・ポピエウシコ神父が誘拐される。犯人の1人は交通警官の制服を着用、飲酒テストと称して車を止め、神父をら致。

10月20日　国営テレビが事件を公表し、国民に調査協力を求める異例の呼びかけ。

10月21日　グダンスクで神父の解放を求めるミサ後、数千人が市街をデモ。この日の朝ワレサ委員長は急拠ワルシャワ入りし、聖スタニスワフ教会のミサで「神父を奪還しよう」と強い調子で呼びかける。

10月22日　ワレサ委員長とTKKが協議、声明を発表（本誌5頁）。司教会議もグレンフ大司教名でコミュニケを発表、神父の生命を危惧。

10月24日　治安当局、内務省職員1人を含む複数の容疑者を拘留。

10月25日　内務省職員ら3人を逮捕。車から神父の毛髪と着衣の一部を発見。フタ・ワルシャワ「連帯」が29日からのスト準備を指令。ワルシャワ大学では連続3日間の非合法抗議集会。

10月26日　党中央委総会でヤルゼルスキ首相が神父誘拐を非難。中央委も事件糾弾声明を採択。

10月27日　「連帯」神父捜索委員会のヤヴォルスキ委員長、神父は治安警察により拘束中と語る。夜、キシチャク内相が内務省所属治安警察官3名が誘拐犯と公表。同時に「この事件から不当な結論を引き出さないよう」警告する（本誌5頁参照）。

10月28日　スタニスワフ教会のミサに信者、「連帯」支持者ら5万人が参加。ワレサ委員長はグダンスクのブリギッダ教会で自重を呼びかける。ローマ法王、「神父と祖国のため祈ろう」。

10月29日　この日会談したミッテラン仏大統領とコール西独首相がポーランド情勢に懸念を表明。ヴロツワフで市民数百が抗議デモ。

10月30日　夕方、ワルシャワ北西150kmのヴォツワヴェクで神父の遺体が発見される。事件にはある政府高官が関与の疑いという。ワレサ委員長、平静を訴え、政府、教会、「連帯」の対話再開を呼びかける。

10月31日　クーロンらが人権監視委員会の設立を呼びかける。

11月1日　A・グヴィアズダがグダンスクで葬儀当日の1時間の抗議ストを呼びかける。ミレフスキ党書記（治安担当）を含む内務省、党高官解任の方針が伝えられる。

11月2日　政府スポークスマン、クーロンやグヴィアズダを「事件を食い物に」と非難。内務省幹部2人が新たに拘束され、その直属上司1人が停職に。

11月3日　神父の葬儀に25万人が参加。ワレサ委員長が哀悼のスピーチ。

11月4日　遺族によれば、神父の遺体には無数の拷問の跡があったという。

11月5日　殺害犯の直属上司A・ピエトルシカ大佐を逮捕、誘拐・殺害の教唆・ほう助容疑で起訴。

11月6日　緊急党政治局会議、内務省の全活動および同省内の党活動をヤルゼルスキ首相・第一書記の直轄下におくことを決定。　〔編：水谷　驍〕

ポピエウシコ神父誘拐殺害事件

イエジ・ポピエウシコ　Jerzy Popiełuszko

1947年ビアウィストク県オコプィ生まれ。1965年ワルシャワ神学校入学。1966年から1968年までバルトシツェの特殊軍部隊に従軍。1972年5月27日ヴィシンスキ大司教により司祭に任じられる。当初ワルシャワ郊外各所で、のちにワルシャワのいくつかの教会で司祭をつとめ、1980年6月以来聖スタニスワフ教会に。1978年以降ワルシャワ医学協会礼拝堂司祭。

1980年夏フタ・ワルシャワ製鉄所でストライキが始まった時、ヴィシンスキ枢機卿の要請でここでミサを行う。ワルシャワ医学アカデミーのストに際し、また「連帯」全国大会ワルシャワ代表団の会議に際してもミサを司式。1982年2月、最初の「祖国のためのミサ」。4月以降これは毎月最終日曜日の定例行事となり、毎回数千以上の聴衆を集める。

1983年12月12日ワルシャワ地方検察庁に出頭を命ぜられ、3時間の尋問の後連行された彼のアパート(5年前およびから寄贈され日常的には使っていなかった)から、ガス弾筒、爆発物、機関銃弾数条、1万5,000点以上の地下出版物、1983年12月13日と16日に武装蜂起を呼びかけたビラ、などが「発見」される。翌13日夜9時過ぎ、司教会議官房長ドンブロフスキ大司教の介入により釈放される。

釈放後のミサで事件は挑発であると声明、12月15日の「祖国のためのミサ」には1万2000～1万5000人が参集し、神父に対する圧倒的な支持が表明された。その後のたび重なる弾圧（喚問、家宅捜索、いやがらせなど）にもかかわらず、当局批判、「連帯」支持の言動を続ける。たとえば4月1日、ガルヴォリンの「十字架戦争」（本誌84年5月、6月号）で高校生たちを支持する声明を発表、5月27日、「連帯」が呼びかけていた地方議会選挙ボイコット支持を表明、6月24日、全政治犯の釈放を要求、などである。5月31日には警察で拷問されて死んだG・プシェミク事件の犯人裁判を傍聴しようとして官憲に入廷を阻止されるといった事態も起きている。

ポピエウシコ神父

1984年7月14日、ワルシャワ地方検察庁により宗教の自由の政治的乱用、国家を中傷する非合法文書の保持、無許可の弾薬および爆発物の所持の罪でワルシャワ地裁に起訴される。しかし8月24日、恩赦法が適用されて起訴は取り下げられ、事件の真相はうやむやに。

その一貫した当局批判、「連帯」に対する深い理解のゆえにポピエウシコ神父は、グダンスクの聖ブリギッダ教会のヤンコフスキ神父（ワレサ委員長の親しい相談相手としても有名）やかつてのウルススのノヴァク神父（本年2月、別の教区に移動させられる）らとともに当局およびその意向を受けた「氏名不詳者」の絶え間ない非難攻撃にさらされてきた。

〔Uncensored Poland News Bulletin より。
編：水谷　驍〕

在外調整局声明

Coordinating Office
Abroad of NSZZ "Solidarność"

1984年10月19日、イエジ・ポピエウシコ神父が誘拐された。10日たってもその安否は明らかでない。しかし時が経つにつれ神父は殺されているという懸念が深まっている。

内相にしてポーランド治安部隊総司令官であるチェスワフ・キシチャク将軍は1984年10月27日、政府およびポーランド統一労働者党を代表して、ポピエウシコ神父が内務省部長グジェゴシ・ピォトロフスキ大尉とその2人の部下ヴァルデマル・フミエレフスキおよびレシェク・ペカラの3名の内務省警察幹部により誘拐されたものであることを正式に発表した。内相発表によれば、容疑者は逮捕され取調べを受けているが、自白内容は矛盾しており、ポピエウシコ神父の居場所あるいは誘拐への他の共犯者の関与の可能性について情報は得られていない。

イエジ・ポピエウシコ神父はワルシャワの聖スタニスワフ・コストカ教区司教代理で、その深い愛国主義と、人間の尊厳および基本権の順守を求めるわれわれ独立自治労働組合「連帯」の現在の闘いに対するその勇気ある支持のゆえにポーランド内外で知られている。毎月開かれる神父の「祖国のためのミサ」には数千人の参加者がある。こうしたミサで行われる神父の説教は記録され、独立自治労組「連帯」の情報ネットワークを通じて全ポーランドに流されている。

戒厳令の施行以来ポピエウシコ神父は当局の批判を受けてきた。しばしば警察により尋問のため喚問されてもいる。住居は家宅捜索を受け、威嚇と脅迫が何度も試みられている。検察庁は神父を「社会主義的秩序の信用を失墜させるために宗教を政治的目的に利用」したとして正式に起訴していた。この起訴は1984年7月の恩赦によってようやく取り消された。

この2年間、私服の秘密警察が神父を不断の監視下に置いていた。まさにこの事実が、当局の正式の承認のない誘拐の可能性について、ポーランド国民の間に疑念を生み出している。1984年9月4日の記者会見でイエジ・ウルバン政府スポークスマンは次のように述べた。「……一部の神父たち、たとえばワルシャワのポピエウシコ神父、グダンスクのヤンコフスキ神父、ノヴァフタ〔クラクフ〕のヤンツァシ神父たちは今もなお宗教的儀式を政治的集会に変えている。……彼らは司教会議の指示にもかかわらず、またわれわれの警告にもかかわらず、これを改めていない。警告は空に向けられているのではないことをすべてのポーランド人は今や認識すべきである」。

ポピエウシコ神父の写真には多くの花束が。

ポーランド人は現在の「現実社会主義」体制のテロ行為について十分な経験を積んでおり、今やすでに神父の幸せのためではなく、神父の魂のために祈りを捧げている。よく知られた最初のテロ事件は1981年3月にビドゴシチで生じた。この時、ビドゴシチ県人民議会の会議への出席を正式に招請されていた「連帯」代表団が数百名の制服を着けた「氏名不詳」の警官隊に殴打された。1983年5月、高校生のグジェゴシ・プシェミクがワルシャワの旧市街の一角にある警察署で「氏名不詳」の警察官による尋問中に殴打され致命傷を負った。彼はこのけががもとで病院で死んだ。1984年2月、「農民連帯」の中心的指導者の1人、ピォトル・バルトシチェが原野で死体で発見された。公式調査は殺害を立証できなかった。過去3年間に「連帯」活動家がガソリンをかけられて火をつけられたり、酸をかけられたり、「氏名不詳」の私服ないし警官により殴打された事例が多数ある。逮捕されたのち警察署で尋問中に殴打されて致命傷を

負った事例は10件以上にもなる。それにもかかわらず、正式に解明され、犯人が特定され処罰された事例は1件もない。

ポーランド国民はこれらの事件の犯人が「彼ら」であることを、つまりこの国で国民の意志に反して権力を行使している者たちであることを深く確信している。

独立自治労働組合「連帯」在外調整局は、ワレサ委員長とTKKの声明に従い、人間の自由と権利に関心を持つすべての人々に対し、イエジ・ポピエウシコ神父防衛のための行動をとるよう呼びかけている。この誘拐は、独立自治労組「連帯」とこれを支えるポーランド内外の何百万という人々に対する挑発的攻撃であることが認識されなければならない。

1984年10月30日
独立自治労組「連帯」在外調整局

〔Solidarność News, No34, 1984.10.30
訳：水谷驍〕

暫定調整委員会声明

Statement by L.Wałęsa & TKK

ポピエウシコ神父の誘拐はポーランド社会の激怒を招いている。神父は労働者の権利のために最も献身した聖職者の1人である。労働者の権利と尊厳を求めるその勇気ある闘いを通じて、神父は並ぶもののない道義的権威と何百万ポーランド人の支持を獲得した。

今回の誘拐は偶発的事件ではない。1981年12月13日以降、「連帯」の活動家と支持者に対し同様の暴力行為が加えられてきた。ストライキや平和的デモ、教会でのミサの間に法と秩序の守護者を自任する者の手によって殺され、あるいは迫害された戦時体制の犠牲者のリストに、今やわれわれは「氏名不詳者」によって誘拐された神父の名前を追加しなければならない。個々人に対するテロと脅迫はいまや政治闘争の絶えざる慣行となってしまった。

法律が常に侵犯され、治安機関がもっぱら政府の利益に奉仕するだけで社会的統制を受けないような国においては、この種の行為のすべてははかり知れない結果をもたらしうる。

われわれはポピエウシコ神父が安全かつ無傷で教区に戻ることを期待したい。同時にわれわれは、この事件の全帰結について政府が答えるべきであることを知っている。

グダンスク協定の侵犯が社会的諸問題を解決する手段として暴力に訴えるという危険なやり方の口火を切ったことが、今ふたたび明白になった。

1984年10月22日
レフ・ワレサ（委員長）
ボグダン・ボルセヴィチ（グダンスク）
ズビグニェフ・ブヤク（ワルシャワ）
マレク・ムシンスキ（ヴロツワフ）
エウゲニウシ・シュメイコ（全国委員）
クラクフとカトヴィツェの「連帯」地方組織代表が匿名で参加

〔同上〕

キシチャク内相声明

Speech by Interior Minister, Excerpted

イエジ・ポピエウシコ神父の誘拐は党が採っている政治的紛争の解決方法とは何の共通性もない。まさに正反対である。この前代未聞の挑発は、合意の政策と再生の路線、それゆえに社会主義ポーランドを危うくしようとするものである。真実は、いかに痛苦に満ちたものであれ隠蔽されてはならない。しかし同時にそれは利用されてはならない。個別的事件から不当な一般的結論を引き出してはならない。これは、内務省を非難し、社会主義的法の支配に疑問を投げかける人民支配の敵どもがやっていることである。カロス警察軍曹の虐殺にあたりジフ神父が果した役割はよく知られている。しかし良識ある人は誰も彼の態度を聖職者全体のそれに一般化したりはしない。同様に誰もあの悲劇の背後で秩序と平静が破られているなどとは言わなかった。内務省の個々の職員の犯罪行為を公共の秩序と安全を司どる機関全体のそれとみなすようなことがあってはならない。

〔Embassy of the PRL, Tokyo, Press Release, Oct. 28. 1984　訳：水谷驍〕

真実　勇気　「連帯」——ポピエウシコ神父の説教から

from Homilies by Father Popiełuszko
Uncensored Poland News Bulletin,No.20/83,No.12/84

1983年8月28日

……祖国再生のための一連の試みとして「連帯」が誕生してから3年を迎える。それはまたたく間に巨木に成長した。いま、木は切り倒され、枝は払い落されたが、その根は人間の心の中にしっかりと根付いていて、新しい芽の誕生が全世界にそれがいまなお生き続けていることを知らせている。

……自由は人間の根本的な価値である。自由の放棄、とりわけ良心と信念の自由の放棄は、神の意図に逆う行為である。この間、人間的自由の極端な制限を受けてきたポーランド人は、戒厳令の解除と恩赦が相互の不満と過去の傷をいやし……1981年12月に断ち切られた対話の再開を可能とすると期待する権利をもつ。

……実り豊かな対話と調和のとれた再生のためには真実が尊重されなければならない。市民権の一層の制限を伴うかぎり、和解の意志は本物とはみなされない。……それは1980年以前はおろか、1956年以前への逆戻りを意味する。

……1980年8月の偉大な高揚をきっかけに人間の気持は大きな変化を遂げたとレフ・ワレサがこの6月27日法王に語った時、それは真実であった。国民は自らが望むものを知っており、この変化は元には戻しえない。……1981年12月の夜の暴力は国民との対話を断ち切った。12月15日、司教会議は述べた。「……当局のこの決定は、社会の期待と希望に対する一撃であった」。「連帯」は自由に存続する権利を持つ。これは真実である。そのために高い代償を払ったのだから。……たしかに、何10年の沈黙と辛苦ののち、時として国民は無秩序に、あまりにも高く声を上げすぎた。だが「連帯」は故枢機卿が述べたように、慎重に考え抜かれたどんな政策も実現できなかったことを数カ月で達成した。「連帯」が短期間のうちに、各自の自由意志に基いて任意に参加した数百万の人々を引きつけたのは事実である。そして、さまざまな圧力にもかかわらず、〔官製〕新労組がどんな状態にあるかは誰でも知っている。

……正義が要求するのは、何よりもまず、教会に対する中傷や8月協定のねじまげ、最近のマスメディアによるレフ・ワレサ攻撃に反撃する権利である。正義は労働組合の複数制と自由な結社、自由な教育を要求する。最後に、正義は、真の国民的和解につながる真の全面恩赦を要求する。和解は、よりよい未来の建設のために費やされた時間と努力がふたたびもうひとつの「錯誤と偏向の時代」とされることがないよう、保証を与えるものでなければならない。

最後に、「連帯」はポーランド人が1980年に獲得した深い道理である。それは人間の尊厳の尊重と他人の必要の認識を声を大きくして要求する。それは獄中の人々とその家族に対する配慮を意味する。それは、われわれすべての確信を声をあげて主張したために、いためつけられ迫害されてい

スタニスワフ・コストカ教会でVサインをかかげるミサ参加者

る人々に対する兄弟的配慮を意味する。……最後に「連帯」は、外的束縛の事実にもかかわらず内部に残る自由を、のど元をとらえる恐怖の克服を、万人が神の子であるという認識を、そしてわれわれすべてが真実かつ正義と確信することを主張する勇気を意味する。……

1984年5月27日

真実に生きるとは自らの良心に忠実に生きることである。真実はつねに人々を結びつけ、強くする。それは卑劣な人間のうそをあばき、彼らを怖れさせる。何世紀にもわたって真実に対し攻撃がしかけられてきた。しかし真実は不滅であり、うそはすべて短命である。

検閲が悪に対してではなく、高貴にして善なるものに向けられる時、真実は危うくされる。カトリックの新聞においてさえ、法王とそして大司教の言葉が禁止されたことを見よ。……

「連帯」のなしとげたものに否定の光があてられ、その存在の痕跡にいたるまでが破壊されつつある時、真実は危うくされる。……

人々がその信念に従ったという理由で投獄される時、真実は危うくされる。「連帯」の指導者たちを始めとするわが兄弟たちがうそを語ったために投獄されたのであれば、どうして教会が彼らの防衛のためにこれほどの力を捧げるだろうか？どうして彼らの釈放を求めるだろうか？

むき出しの暴力と力の誇示に頼れば真実は危うくなる。正しい統治は暴力と虚偽との絶縁を要求する。これは平和と実り豊かな建設の道である。しかし平和は、人々に沈黙を強いることと解されてはならない。……

人間の解放と……そして真実に生きるための根本条件は勇気である。キリスト者は真実を求めて闘う時、勇気を示す。勇気は人間の弱さ、とりわけ恐れを克服することである。恐れなければならないのはただひとつ――わずかの銀片のためにキリストを売り渡すことである。

キリスト者は、悪、虚偽、卑怯、隷属、憎悪そして暴力を断罪するだけにとどまってはならない。キリスト者は同時に、正義、善、真実、自由そして愛の証人にして代弁者、その擁護者でなければならない。こうした価値のすべてを自分のために、他人のために要求しなければならない。「勇気ある人間のみが真に誠実かつ廉直たりうる」（ヨハネ・パウロ２世）。

「勇気を欠く人々に災いあれ。……勇気を放棄する人は奴隷となり、自らと自らの家族、働く仲間たち、国民そして教会をいちじるしく傷つける。たとえ恐れのために、何がしかのパンととるに足りない何かの利益を得ようとも……」。だが同時に、「脅迫と奴隷の恐怖によって人を従わせようとする支配者に災いあれ。……恐怖を通じる統治は、統治する者の尊厳と権威をおとしめ、国民生活と文化を貧しくする……」（ヴィシンスキ枢機卿）。

われわれがもし、恐怖のために、そして個人的な快楽のために、悪を受け入れ、悪が働く仕組みに肩入れさえするとすれば、自らの隷属の責任は主としてわれわれ自身にある。恐怖から、あるいは快楽のためにわれわれがこの悪の仕組みを支持するとすれば、これを断罪する権利はもはやわれわれにはない。なぜなら、それを支え、悪を合法化するのはわれわれだからである。

1980年8月の労働者は勇気の試練に耐えた。そして今日、多くの労働者がこれに耐えつつある。

獄中にあるわが兄弟たちは勇気の試練に耐えた。彼らは、われわれの共通の理想を裏切るという代償を支払ってまで自由を選ばなかったのである。

要するに、この警告を、この知恵を大事にしよう。勇気の力を放棄し、自らを欺き、間違いを正しいと言いくるめ、半面の真理に迎合する民族は長くは生きられない、と。自分自身が真実の中に生きている時にのみ他人に対しても真実を要求できる。この当然の理を日々大切にしよう。他人に対して自分自身が公正である時にのみ公正は要求できる。自分自身が勇敢である時にのみ勇気は要求できる。

〔訳：水谷　驍〕

恩赦その後――指導者は語る

Afer Amnesty – Leaders Speak Out

大衆に活気を与えるプログラムを

インタビュー：ヤン・ルレフスキ（ビドゴシチ地区「連帯」議長）

Rozmowa z J.Rulewskim
Biuletyn Informacyjny nr.97(3.10.84)〔Tygodnik Mazowsze nr.98,6.IX.84〕

【編集部注】ヤン・ルレフスキ　Jan Rulewskiは1944年生まれ。1980年9月以降ビドゴシチ地区企業連合委員会議長。1981年3月19日、ビドゴシチ県議会庁舎で警察機動隊の暴行を受けた事件は、ポーランドをゼネスト寸前にまで追いやった（ビドゴシチ事件）。81年7月以降、ビドゴシチ地区「連帯」議長。81年9月の「連帯」全国大会では委員長選挙に立候補、3位で落選、しかし全国委員会委員に選出される。81年12月13日、戒厳令布告とともに拘留され、82年9月、モゼレフスキら他の「連帯」指導者とともに「国家転覆罪」容疑で正式に逮捕、起訴される。84年8月、恩赦により釈放。恩赦直後の8月13日、ビドゴシチの教会で多数を前に演説をしたことをとがめられ、地方検察庁の喚問を受けたことが報じられている。なおこのインタビューは、地下紙『ティゴドニク・マゾフシュ』第98号（1984年9月6日）に発表されたもの。

――刑務所はあなたの考え方に影響を及ぼしたか？

刑務所は私のモラルの背骨を強化してくれた。検察が「連帯」のありとあらゆる新聞、文書をかき集めてこしらえ上げた起訴状は、ことの正当性を今いちど私に確信させた。だから公判が待ちどおしくてしかたがなかった。私がわざわざ新しいことを考え出すまでもない、検事殿の集めてくれたものをただ引用すればそれで充分だったのだ。

刑務所にいれば誰だって気弱になることがあるものだ。私の場合は拘留センターからラコヴィェツカの刑務所へ移された時（あらかじめ予期してはいたのだが）がそうだった。当局によって引っぱり出された時（クリスマス・イブだった）、それはショックだった。しかし大みそかの晩にはもう、ラジオ「連帯」の1回目の放送が聞けた。それは気弱さを乗り超えるための最良の手段になったし、官憲がわれわれにやっきになって吹きこもうとしていたようには、われわれは孤立していないというしるしでもあった。

――刑務所ではどうやって組合の活動を知ったのか？

情報は、職場や街頭でのように人々の活動を介して伝わってきたわけではない。まともなルートでそれを受け取ることは無理だった。そんなわけで、TKK決議の1つ1つを、世界への呼びかけと受け取ったり、あるいは、それがわれわれの期待に添わない場合には、投降声明として受け取ったりした。時には、極端から極端へと気持が激しく揺れ動いた。けれども私はいつでもTKKの勝利をそこに見ようとしていたし、それは今も変わりがない。ただの議論としてなら、活動を評価して、「5」だとか「4」だとか、いや、ただの「4」だとか点数づけもできるだろうが、組合の勝利というのは、あのような異常な事態のなかで人々の中から指導者の役割を引き受ける人間が出現したことにあるのだ。

私の感じた失望についても話しておくべきだろう。TKKは、大衆がTKKに対してもっと大胆な行動をとる権限を与えてくれることを期待していた。ところが事実はその反対だった。共同体の

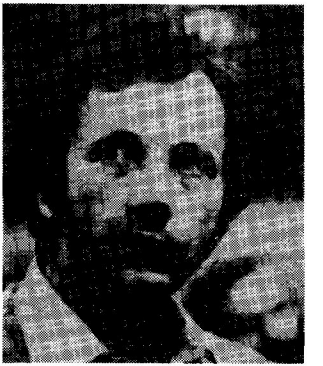
崩解、組織の崩壊という局面において、ＴＫＫはより大きな権限を持たなくてはならず、唯一の組合本部として名乗りを挙げざるを得なかった。あくまでも監禁を拒み通したＴＫＫメンバーがいく人かいた以上、それが当然だった。外部からの、たとえば、拘留センターとか知識人とかの空虚な声などに耳を傾ける必要はなかった。ＴＫＫが指導部としての権限を持つに至ったのは自然のなりゆきだった。だがその指導部は勝利を得られなかった。

地下「連帯」の犯した最大の過ちは、「連帯」非合法化の際にグダンスクのいくつかの工場が先頭に立ったストライキを支持しなかったことだ。私はそれが最後の大きなチャンスだったと思う。なにしろグダンスクは、ポーランド国内はもとより、全世界から信頼されている。もっともそれは実際にはレーニン造船所なのだが。私自身、あのストライキが成功したかどうかについては確信を持てない。だが、四の五の言わずにとにかく合流すべきだったのだ。そうすればわれわれの権利を求める戦いのあかしがもう１つ加わっただろうに。

もう１つの過ち、それは、時間の経過の割にはわれわれがあまり大きな勢力になれなかった点だ。おどかされて縮こまってしまったり、投獄される人間が増えるに従い、かえって目標は高くなっていった。われわれはストライキやデモといった武器にあまりに多くを期待しすぎた。たしかに、成功すればその効果は大きい、しかしうまく行かなければオルガナイザー達を裏切る結果になる。大衆に活気を与えるためのプログラムがなかったのだ。２人の子供をもった紡績女工にデモへの参加を求める方が無理な話だ。組合費に50ズウォティ払ったり、１周年記念日のミサに参加したり、これもまた戦いの１つの方法だろう。われわれの運動にはそうした戦術が欠けていた。

――恩赦についてはどう考えるか？

これも、一連の不法な法の行使の１つだと思っている。恩赦とは犯罪人に対して行われるものだ。ところが私は私の罪とかいうのを知らされていない。いわゆる恩赦法なるものは人々の無期限拘留に正式な承認を与えたのちに釈放を認可する、それが人道的だと喧伝される。したがって、恩赦は



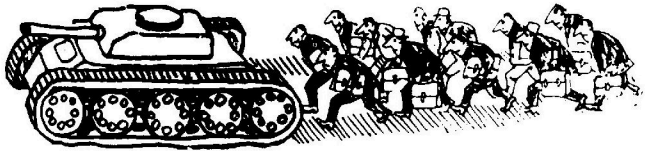
ヤン・ルレフスキ

宣告されてもいない刑の執行を免除するという虚構にすぎない。われわれはありもしない告訴に対しては自らを弁護することもできないし、控訴もできない。だから私は恩赦を認めるわけにはいかない。結局、私は罪を犯しているわけではないのだから、いままでやってきたことをこれからも続ける権利がある。何１つ私は知らされていない、だから自分で自分の手を縛って自らに沈黙を強いることはできないのだ。

――刑務所の壁の向こう側から出て来て最初に外の様子はどう見えたか？

８月13日、私はイエズス会の教会へ行った。私はああいったたぐいの表面的な意志表示や勝利を誇示する形式というものに懐疑的なのだが、この時ばかりは人々の心からの熱烈な歓迎にはびっくりしてしまった。3000人、あるいは5000人もいただろうか、みんな目に涙を浮かべ、両手で例のサインを掲げながら愛国歌をうたっていた。大衆集会の雰囲気だった。私は、ささやかな献辞を捧げてその燃えあがった熱情を静めて十字架の置かれている場所にふさわしい敬意を表したいと思った。私はレーホンの『晩禱』を読みあげ、それをヴエク炭坑とルビンの労働者たちのために捧げた。われわれの釈放に力を尽してくれた人たちや、６月17日に投票箱に背を向けた人たちすべてにお礼を言った。そして、祈りや手紙でわれわれへの連帯の気持を表わしてくれた司教、神父の方々にも感

オドノヴァ(刷新)の前衛」前衛役の戦車の後を役人たちがぞろぞろついて行く、軍政風刺漫画



AWANGARDA ODNOWY

謝した。最後に、私の思いを伝えてしめくくった——「連帯」の存在が歴史の消ゴムによっても、策略や戦車のキャタピラによっても消し去られることがないならば、それ自体大きな成果なのだと。

当局の反応はすぐにあった。検事局で私は、私の世界観からして（検事がどこからそんな情報を、それも間違った情報を得たのか私の知るところではないが）私には教会に通う権利がないと言われた。教会法に詳しいその内務省大尉はミサでの私の発言の根拠を崩しにかかった。「非行」——「連帯」バッジをつけて歩いたり、声明に名を連ねたり、インタビューに答えたりといった行為のことらしい——のために恩赦の特典が取り消される可能性があるとおどされた。短い声明を出したことはあるが、それが秩序や法を侵害するものだとは私は思わないし、そのことではこれからも釈明などするつもりはまったくない。

——8月31日のビドゴシチはどうだったか？

——8月31日のビドゴシチはどうだったか？

組合活動家たち、文学者組合と美術家組合の指導者たち、それに医師たち——かれらと共同でわれわれは当局に対して「妥協的」提案をした。音楽家協会のホールでちょっとした顔合わせをしようと持ちかけたわけだ。われわれは何よりもまず、ワナにかかるおそれを少なくしたかった。当局がワナをしかけるのはビドゴシチではおぞましい伝統になっている。だれもが合意を求めている以上、われわれは1歩でも前進し、合意の形成に近づきたかった。各界の代表者たちが合意についてどう見ているかを話すことになっていた。当局からは、「8月の合意」を思い起こさせるものには賛成できない、という返答があった。

——ヴロツワフではフラシニュクとビニオルが逮捕されたが。

ヴロツワフの組合活動を封じ込めようというつもりなのだろう。ヴロツワフは先進的活動の中心であり、ほかの地方の人々にとっては最後の持ち駒だ。もし世論が努力を怠れば、フラシニュクとビニオルが2ヵ月間服役するだけでは済まず、同様の事件が頻発することになるだろう。

——これからあなたはどのような活動をめざすのか？

私は職場での公然活動方式を支持する。TKK内部でこの考え方を出せば即座に否定されるかもしれない。しかし公然活動の可能性までが消し去られたわけではないのだ。地下「連帯」には独自の地位と独自の価値がある。しかし私が地下で活動できるチャンスはわずかなものだ。それに経験も不足している。公然活動において自らの存在を示す人間の居場所もまた必要なのだ。

——将来に何を期待するか？

ありとあらゆる良いことを期待している。

〔『週刊マゾフシェ』98号（84年9月6日付）
「連帯」パリ通信97号（84年10月3日付）より
訳：篠崎誠一〕

職場活動の強化を

Z・ブヤク

Statement by Z. Bujak, 1984.8.30
Uncensored Poland News Bulletin, No.19/84, 1984.10.4

【以下は1984年8月30日、ラジオ「連帯」を通じて流されたズビグニェフ・ブヤクの声明である】

毎年8月になると、われわれはわが国の国境をはるかに越えた重要性をもつ3つの偉大な事件を記念しなければならない。ポリシェヴィキ軍に対する勝利（1920年）とワルシャワ蜂起の勃発（1944年）、そして「連帯」の結成（1980年）である。いずれの事件もわれわれの主権と独立の願いを表現している。しかし「連帯」が表現するものはこれにはとどまらない。「連帯」はわれわれが達成したいと願う民主主義と自由の諸原則に関する全国民的な一致協力の場である。それは全組合員の意志に導かれて、表現と信仰の自由の防衛に、少数者の権利と科学文化の自由の擁護にあたった時、そのようなものとなった。同時に「連帯」は、わが国の社会的、政治的生活の他の多くの分野においても改革の方向を指し示した。以上すべては、われわれの全国大会の諸決議の中に明らかである。全体主義の諸条件の下で生きるわれわれのような社会にあっては、このような共通の場が独立と主権のためのかぎとなる。

まさにそれゆえにこそ私は、ポーランドの存在理由が「連帯」の存在とその活動を要求しているのだと考える。わが組合のこの偉大な役割を、自らの生命を危険にさらすのをちゅうちょしなかった人たち――ヴエク炭坑で死んだ鉱夫たち、ルビンのデモ参加者たち、その他多くの人たち――はあますところなく理解していたのだと思う。死者たちの名前はすでに50人を越えている。彼らの犠牲を想いつつ、今日私は強調したい。「連帯」が存続する権利は交渉におけるいかなる取引き対象ともなりえない、と。だが、この言葉がむなしく空を打たないためには、われわれは「連帯」が心の中に存在するだけで満足してはならない。職場の中に実際に組織を生かし続けなければならない。わが組合の存在はつねに現実でなければならない。1980年8月の合意がＩＬＯ諸条約や組合規約、および大会諸決議とともに今なおわれわれの行動のための法的基礎である。わが国の権力の継承者たちはすべて先任者が引き受けた合意と義務に縛られる。

「連帯」は若い。年数で数えればそれは4歳になったばかりである。だが経験の豊かさで測ればこの時間は長い。そして経験は力を与える。

そこで今日、「連帯」がその5年目にあたりとりわけ職場の中で再建されるよう、全力を尽すよう諸君たちに要請したい。これまで積極的に活動してきた組織を援助し、さらに強化しよう。工場や地区の単位組織は自分の力でさまざまなイニシアティヴがとれるようになるべきである。要するに、わが組合のために、その日々の活動を組織するために、一層の責任を引き受けるのだ。

まだ多くの人たちが獄中にある。ボグダン・リスとピョトル・ミエジェフスキがそうだ。われわれすべてが彼らの釈放を求めて闘い続けていることが彼らにもわかるように、声を大きくして彼らの名前を呼ばなければならない。今日、たとえ1人でも政治囚を見放すならば、それは「連帯」全体の破壊を意味することをわれわれは知っているからだ。

〔訳　水谷　驍〕

ズビグニェフ・ブヤク

反対派の政治地図

One Man's View on the Political Geography of Polish Opposition
Uncensored Poland News Bulletin, No.15／84, 1984.8.2,London

【編集部注】　地下紙『出版所連合ビュレティン（BMW）』第5／6号に、"セヤン"というペンネームで「霧を抜け出す」と題する論文が発表された。これは、ポーランド国内の反対派の政治地図に関する個人的所見としてはかなり良くできた論文である。

論文はまず、ポーランドの反対派の1976年以来の流れをざっと見わたし、「連帯」時代に百花繚乱の相を呈した反対派グループの様々なプログラムが戒厳令で大部分瓦解した後、空白と混乱の時期を経て、1983年は新たな政治プログラムの生まれつつある年であるとしている。そして戒厳令期間中の反対派活動を、①「連帯」系　②「連帯」とは一定の距離をおく政治的反対派　③カトリック教会や社会運動などの合法的反対活動、の3つに大別し、②の政治的反対派の主要グループについてそれぞれの特徴や傾向を述べている。取り上げられたのは、『自由・公正・独立（WSN）』（本誌1984年5月号参照）、『民族連帯会議（KSN）』（本誌1984年5月号参照）、『声（グロス）』グループ（本誌1984年2、3月号参照）、『ポーランドの政治』グループ、『地下の言葉』グループ、『独立』グループ、政治運動『独立回復』、『戦う連帯』、『意志』、『13』グループ、『祖国』グループ、『現代人文主義同盟』、そしてウィーンで活動する『ポーランド・キリスト教民主主義同盟』である。続いて、これら政治的反対派の体系的分類をこころみる地下論文3編を紹介・論評している。

この論文はかなり長いもので、また個々の反対派グループに関する記述は大部分の日本人には不必要に細かいため、本誌では後半の体系的分類に関する部分のみを訳出した。（論文を通読したい方は編集部あて連絡下されば英文テキストを実費で送ります。）また、論文の最後には、今回取り上げなかった「連帯」系反対運動や合法的反対活動もいずれ別の機会に論ずるつもりであると書かれている。

ポーランドの反対派の政治地図を扱った地下論文としては、現在のところ次の3つが主要である。

① ヤン・ヴォルヌィ（グループ『自由・公正・独立』所属）の「独立政治の諸派」。初出『政治評論』1983年第2号、のちに要約版が『独立思想』1983年第19号に掲載。

② アントニ・ヴィフジチェルの「ポーランド反対派の政治概観」、月刊『独立』25号（1984年1月）。

③ ヴイの「3つの道――地下連合のチャンス」、月刊『反論（レツパ）』1983年第19号。

〔ヤン・ヴォルヌィとヴイはペンネームであろう。ヴィフジチェルについては不明――訳者〕

ここでまずこの3論文の内容を手短かに紹介しよう。

ヴォルヌィ論文は、ポーランドの現在の政治活動に少なくとも2つの潮流を見ることができるとしている。片や「社会民主主義」的、片や「民族民主主義」的と集約されるものである。第1の「社会民主主義」的傾向を持つ諸グループは、個人の自由を高く評価し、社会的諸価値や社会的約定を認め、大規模所有を制限したいと考えている。これらのグループはポーランドという国について、（少数民族の権利を尊重しつつ）現在の国境線はそのままで、中欧諸国連合の内で他と対等な1個のパートナーとなる姿を思い描いている。一般的にいってこの第1の潮流は、主として戦前からのポーランド社会党〔1948年社共合同により解消〕の民主・独立の伝統に根ざしている。ヴォルヌィは、この潮流の中に社会自衛委員会KOR、KO

S、その他の明確な綱領を持たないあるいは知られていない小さな諸グループを含めている。

第2の「民族民主主義」的潮流のグループは、ヴォルヌィによれば、何よりも次の点を強調しているという。個人やグループの理念や価値より民族的理念や価値を重視し、強い政府を主張し、安定した社会システムを望み、制限的自由市場経済をある程度認めている（明白な政府の市場介入を容認する主張もいくつかみられる）。これらのグループもポーランドの現国境を維持する必要を確信しており、領土要求は放棄している。ほとんどすべてのグループが、カトリックは民族の生活の重要な要素であると強調している。いくつかのグループはポーランド民族連盟〔19世紀末に設立された民族主義的政治団体〕、とくにその中心指導者であったロマン・ドモフスキの政治思想を自らの源流としてあげているとヴォルヌィは述べている。「民族民主主義」潮流は「社会民主主義」潮流と比べて均一でない。各グループの政治綱領（または綱領上の前提）には様々なスペクトルがあり、多くの類似点といくつかの相違点がある——これらのグループを分類するのは難しい。ヴォルヌィはこの論文中、これらを中道右派として記述し、独立ポーランド連盟（KPN）、青年ポーランド運動（RMP）、民族連帯会議（KSN）、カトリック系の小さな社会グループ、『独立』グループ（彼は『独立』を中道に入れている）をここに含めている。

要約すれば、ヴォルヌィは政治的反対派を、ポーランドにとってのふたつのモデル——「リベラル」（左翼—中道）と「民族民主主義的」（右翼）に分類しているといえる。

ヴィフジチェルの論文はより細分化した反対派パノラマを示している。彼は現在ポーランドで活動する政治的グループを、次の2つの基準をもとに位置づけた。基準A　思想的傾向——民族主義的、社会主義的、リベラル：基準B　共産制廃止と独立回復に対する姿勢——融和的、肯定的、積極推進的。彼の分類はおよそ下の図で示される。

ヴィフジチェルは取り上げたすべての政治グループについてきちんとした規定をおこなっているわけではなく、そのため下図に入れられなかったグループもいくつかある。それにしても彼のパノラマ的概説に、『自由・公正・独立』と『ポーランドの政治』の2グループが含まれなかったのは不思議である。

ヴイは地下グループを3つの傾向に分類しているが、それらは民族の独立と自決に関する根本問題においては一致している。違っているのは将来の予測、最終目標の達成可能性の評価であり、そこから生じる戦略である。

第1の傾向は、暫定調整委員会（TKK）とレフ・ワレサを看板とする「連帯」である。“長征（長期戦）”策を掲げ、当局に小さな譲歩を強いる、それがいずれは当局の権力を蝕み、社会の自由と国の独立が徐々に取り戻される——という戦

ヴィフジチェルの分類（本文参照）		共産制廃止と独立回復に対する姿勢		
		融和的	肯定的	積極推進的
思想的傾向	民族民主主義的	『声』	『民族連帯』	『民族連帯』
	社会民主主義的	「連帯」系地下紙の大部分	『KOS』	『ロボトニク』*
	リベラル民主主義的	『自由主義者の印刷所』	『13』	『独立』

＊　この『ロボトニク』はかつてのKORの機関紙とは別のもの。

略を採用している。

第2の傾向は民族独立回復への革命的プログラムを唱えるグループ（『民族連帯』と『独立』など）で、“短征（短期雌伏）”策を掲げ、それゆえ当局との話し合い路線を拒絶、当局との戦いおよび将来の権力崩壊の際への準備に専心している。

第3の傾向は多数の独立ジャーナリスト（S・キシェレフスキ、S・プラトコフスキら）に代表されるもので、ポーランド社会の代表とクレムリンの話し合いを始めることが最良の解決法だ、そうすれば代議員の仲介なしで妥協策が交渉できる、と信じている。

上に要約した3論文はポーランドの反対派の体系的分類をこころみたものであるが、こうしたこころみの常としてどれも完全ではなくそれぞれ欠点を持っている。ヴォルヌイの「左翼」「右翼」「中道」という分け方は政治の世界では伝統的な分類法だが、今日――少なくともわがポーランドにおいては――少々アナクロに感じられる。ヴィフジチェルの2つの基準に従った分類というアイデアについていえば、彼が様々なグループを（共産制廃止と独立回復に対して）「融和的」「肯定的」「積極推進的」と分けるやり方はひどく機械的である。これらのカテゴリーは数百年の歴史を持っており、ここでの文脈にとっては極めて不適当な意味論的内容を背負っている。私は彼の分類法を、様々な政治グループの戦術的観点からの分類のひとつと理解している。

ヴイのカテゴリーにいう“長征”の支持者は「融和的」、“中征”（これは彼の理論にはないものだが）が「肯定的」、“短征”が「積極推進的」となるのだろうが、ある社会の歴史において何が“長期”で何が“短期”かを言える人間がいったいいるだろうか（2年という年月は長いのか短いのか？　20年は？）。ヴイの提案する分類は、充分な考察を経て生まれたものではないようにみえる。彼の採用する基準は唯一でも最重要でもなく、もしも他の基準（ヴォルヌイやヴィフジチェル参照）と取り換えれば全く違った反対派の見取り図が現われる。たとえば、ユゼフ・Bは論文「真の反共？」（『反論』22号、1984年1月）の中で、グループ『13』のミロスワフ・ジェルスキ、『自由主義者の印刷所』のヤヌシュ・コルヴィン＝ミッケ、『声（グウォス）』グループ、ステファン・キシェレフスキをまとめてリベラルと呼んでいる。しかし結局のところ、たとえば『独立』は自らをリベラルで民主主義的な団体と思っていると同時に、（ヴィフジチェルによれば民族民主主義的で融和的な）『声（グウォス）』とは厳密に距離を保っている。それとも、『独立』は自分たちが言うほどにリベラル民主主義ではなく、他の人が言うように民族民主主義なのだろうか？

これに関連して、政治的反対派問題に関する2つの意見をあげよう。2つともに議論の余地はあるが、この問題を取り巻く雰囲気をある程度反映している。まずW・Jが『反論』22号で次のように書いている。

「われわれがそれぞれの反対派の傾向を、どの程度政治的思考や政治的行動の面から扱っているか、明確にすることの方が重要である。……私自身は、少なくとも反対派活動の中心には、全く政治的なものを見ることができない。グループや個人の選択に影響するのは政治的思考などでなく、運動の性格とメンバーの顔ぶれである。……思いがけぬ協力や流動的な同盟関係は、思想的理由よりもむしろ感情的理由によって生まれる。運動やグループの大部分は、思想的、政治的な結合力をそれほど持っていない」。

これに対するある意味での回答が、「誤ったプログラム、にせものの選択肢」（『新しい記録』1983年第2号）という匿名論文に書かれている。この論文の筆者は次のように言う。

「これらすべてのプログラムや政治解決策の欠陥は、その作者たちの罪ではない。政治家が悪いのでもない。悪いのは状況自体なのだ。賢きも愚かなるも政治家は皆両手を縛られている。どれを読んでも、政策の遂行が不可能だということの方が多く書かれている」。

この2つのコメントは反対派の分類がなまやさしい仕事でないことを明白に述べている。私は、諸プログラムがより具体化されるか、またはいずれ政党が創設されるのを待つことが必要だと信じている。とはいえ、今われわれはヴィフジチェルの思想傾向カテゴリー――民族民主主義、社会民主主義、リベラル民主主義（それにたとえばキリスト教民主主義も加えるなどして）――は捨てず

におくべきだと認めることができる。ヴォルヌィの分類――社会民主主義、民族民主主義、中道(リベラル民主主義) ――もいくらかこれに似ている。戦術の方は別の基準に従って考えられねばならない。ヴィフジチェルの分け方はおそらく使えないだろう。よりまともな分類を前出の『新しい記録』2号の匿名論文の筆者が提案している。それは、地下社会構想を唱えるか地下国家を主張するかでグループを分ける方法である。

ここで見た諸グループは、少なくとも現時点ではこれほど簡単に色分けできるわけではない。しかし確かなことがひとつある。それは、これらのグループのほとんどがある一定の見解を持っており、それによりポーランド国内の他の組織から区別されることである。つまりこれらのグループは

① 反共産主義的であり、これは独立をめざすことを意味する
② 民主主義、正義、自由を好む
③ ポーランドは西欧キリスト教文化に属すると考えている
④ ポーランドの現国境を認めている
⑤ 少数民族の権利を認めている
⑦ 大多数は、ソ連邦内の共和国（リトワニア、ラトヴィア、エストニア、白ロシア、ウクライナ）の独立を好ましいと考えている。

それでは各グループ間の相違とは何か？ 相違がみられるのは、将来のポーランド国家と社会の関係（個人―民族―国家関係、国家運営、経済構造）の組織理念においてである。

〔訳：高橋初子〕

1

2

3

4

5

6

7

8

くつろいでいるご主人に犬が新聞を持ってくる ／ よしよしとほめてやるご主人 ／ ところが新聞にはろくでもない記事が載っていた様子 ／ ごほうびを期待して尻尾を振っていた犬は予期せぬお目玉をくらい ／ ご主人は新聞を破りすててすっかりご機嫌ななめ

新語法の手引き

——支配者用語の基礎知識（1）　あ～き

Łopatologiczny słownik nowomowy
Hebdomadaire de Paris　No.12(79), 1984.9.15

【解説】　ソ連圏諸国の公式発表や新聞などの翻訳を読む場合、解説が必要なことは周知の通りである。われわれのみならず、東側諸国の一般の人々も文章の中に何が隠されているか理解するまで相当の熟練を要する。以下の「新語法(ニュースピーク)*の手引き」は、多少一方的な面もあるが、大体それらの諸国、特にポーランドの人々が公式用語を自分流に訳すときの解釈に符合するものであると考えられる。ポーランド「連帯」の戦いはことばを勝ちとるための戦いでもあった。この手引きにみられるように、ことばの意味そのものを狡猾に変えられてしまった世界から、自らのことばを取り戻そうとする運動だったのである。この手引きを読んで笑うもよし、「反共プロパガンダ」と眉をひそめる向きもあろうが、いずれにせよ一度この手引きの助けを借りて、かの公式文書などをお読みいただきたい。この手引きはパリのポーランド語隔週誌からの翻訳だが、原文ではＡＢＣ順に並んでいる項目を五十音順に並べかえ、日本人にわかりにくい部分は省略した。また、各語の説明文中のゴシック体の語は“新語法”なので、それぞれの項を参照されたい。
（＊新語法(ニュースピーク)……ジョージ・オーウェルの小説「1984」にある、為政者に都合良く意味を変えられた言語。詳細は「1984」の巻末付録『新語法の諸原理』参照。）

愛国主義者　ポーランド人民共和国においては**社会の代表**をさす。他国では、**進歩的愛国主義者**。

アクチブ、労働者アクチブ　**社会の代表**と**活動家**の集団。その時々の具体的な宣伝行事のために動員される。

アジア、アフリカ、中南米諸国民との連帯　**人民民主主義諸国**において“連帯”という語を用いる唯一の例。自国の軍事政権や機動隊を相手に正当な権利を得るため戦っている第三世界諸国民にソ連はじめ人民民主主義諸国から与えられる軍事的・経済的援助。その初期にそれらの国々ではソ連軍により基地が建設され、そこが**平和のための戦い**の基点となる。例えばベトナム、エチオピア、南イエメンなどがそれである。（注）独立自治労組「連帯」の意味での“連帯”という語は新語法では存在しないし、存在したこともなかった。なぜならそれは**非実在物**とみなされたからである。

アナーキー　無政府主義。**アパラート**によって計画され100パーセント統制されたものではないあらゆる社会の行動。反対語は**調和と秩序**。

アパラート　党機関。ソ連をはじめ**人民民主主義諸国**を支配する（マルクス主義的意味ではない）少数独裁政治機関。この階級には世襲あるいは補充によって加わることができる。候補者には**原則との整合性**のみが求められるが、**共産主義（4）**に罹患する（もしくは罹患したふりをする）ことも有効である。

アパラチキ　**アパラート**の職員およびその家族。多くの場合、感情的にも物質的にもアパラートと結びつきが深い。**アパラート**、**人民民主主義国の民衆**、**社会**を参照。

アメリカ帝国主義　全世界におけるアメリカの対ソ内政干渉。

ＳＢ（ソビー）　——→**保安局**

オドノヴァ　——→**刷新**

解放　ある国において、ソ連に忠実な政権が生まれること。より効果的なのは、赤軍によるそれらの国々の鎮静化である。

過激派　（**迷える、まどわされた人々**）党綱領を認めず、そのことを隠そうとしない市民すべて。

歴史的には、**反動**、**鼓吹者**、**修正主義者**などが同意語。

活動家　**社会の代表**と同様に**アパラート**の指示に従って**党綱領**を公然と支持する市民。ただし**社会の代表**と違うところは、契約一注文方式ではなく、前払い式か専任方式がとられる点である。

干渉　アメリカの他国への干渉。**国際主義的義務**を参照。

危機（1）　資本主義諸国の経済体制の公的な呼び名。

危機（2）　（1とは正反対）**アパラート**により計画された経済体制。

記念式典　**マルクス＝レーニン主義**における荘厳なミサ。きらびやかな装飾とコーラスやブラスバンドを伴う公的祭典。しばしば**行進**および**平和のための戦い**に従事する軍のパレードを伴う。

共産主義（1）　（目的として。）**マルクス＝レーニン主義**教義においては絶対的で、そう思わなければいけない幸福の園。いつくるかわからないが限りなく近い将来に必ず地上に実現されるといわれている高度なる天国。

共産主義（2）　（**人民民主主義諸国**において誇示的に宣言されている見解。）**ノーメンクラトゥーラ**体制において比較的安穏に生活し昇進するのに必要な盾。**配給券**を得るのに絶対必要な条件。

共産主義（3）　（他の国で誇示的に宣言されている見解。）a)労働者社会においては、権力に対する効果的な対抗手段。破壊的な行動には理想的であるが、建設的目的のための利用を試みる場合は完全に裏切られる。b)知識人の間では、最も安くかつ効果的に世の注目を自分に集める方法。

共産主義（4）　（思考方法として。）あたまの病気、またはむしろこころの病い。その本質は心理的閉鎖、つまり**耳に快よくない情報**の浸透の制限であり、論敵の論拠を受けいれられない。
症状：第1段階……ユーモア感覚の喪失、いらいら、環境への適応困難。第2段階……きょろきょろとした目つき、不自然な陽気さ、あるいはその正反対に牛のようにどんよりとした目、幼児的な顔つき（特に**アパラート**に多い）。過度のアルコール摂取（特に国民の金で）、道徳的自制力の低下、また近くに**配給券**などがある場合右の手のひらのうずき、労働の見せかけの行動へのおきかえ、白赤の色盲。
治療法：軽症の場合……精神療法、地下出版物などを与える（アレルギーを起こす場合が多いので適度に加減する）。その他、都市交通機関を使わせ人々との接触をふやす（郵便配達員や理髪師に共産主義者はいない）。中度の症状の場合……西ヨーロッパへの旅。重症の場合……ＺＯＭＯにたまたま殴られた場合、100パーセントの治癒率が報告されている。その他、観光コースからはずれたソ連旅行。

兄弟関係　ソ連と他の**人民民主主義諸国**との間の2国間関係。ソ連からは思想と中古兵器が与えられ、人民民主主義国は感謝の念を持って物質的見返りと尊敬をソ連に納める。

兄弟的援助　（非経済的分野）軍事面、組合関係、文化面などにおける**中央**の絶対的支配と、**人民民主主義諸国**の服従。兄弟的援助は最終的な形をとることもある（ハンガリー1956、チェコスロヴァキア1968）。

兄弟的協力　（経済的分野）**人民民主主義諸国**とソ連との間の経済関係。**中央**が一方的に値段を決めることが前提である。**人民民主主義国**同士の経済関係も、**中央**の指示と条件を満たすならば兄弟的協力と呼ばれる。しかしそれ以外の場合は、2国間協力と呼ばれる。

ソ連邦内の少数民族——最近の動きから

Grupy mniejszościowe w ZSRR
Kontakt No. 7／8 (27／28), 1984, Paris

【編集部より】　ポーランドの現状をどうするかについて語るとき、しばしば口にされるのが、「結局ソ連が変らぬ限り……」という愚痴めいた言葉である。ソ連が変わるにはソ連内部の運動の活性化が必要である。ポーランド「連帯」の活動に刺激を受けたといわれるソ連内のとくにバルト3国をはじめとする少数民族の最近の動きを、いくつか短信風にお伝えする。

□リトワニア

リトワニア共和国の全人口中、リトワニア民族の占める割合は約80パーセントであり、この割合は増加しつづけているためクレムリンの“ロシア化政策”は思うように進んでいない。

1978年11月に、A・スヴァリンスカス、S・タムケヴィチウスの両司祭を中心とする5人の司祭により「信者の人権擁護委員会」が創設されており、また「リトワニア・カトリック教会ニュース」という非合法紙も発行されている。1983年末、収容所送りになっていたスヴァリンスカス、タムケヴィチウス両司祭の釈放を求める請願書が作成され、12万3000人のリトワニア市民が署名（うち22人は自分の血で署名した）、リトワニア・テレビでは最高裁長官が「署名は有罪」と脅しをかける騒ぎになった。信者代表団は請願書を提出しようと3度にわたりモスクワへ行ったが、結局請願書は警察に押収され代表団はカウナスへ強制送還された。

政府は祈祷書16万部の印刷と、始めてのリトワニア語ミサ典書の発行を許可した。

□ラトヴィア

1940～59年の間にソ連邦内のラトヴィア人の数は160万人から140万人へと減少し、その後横ばいを続けている。1979年の公式データによれば、ラトヴィア共和国の民族構成比に占めるラトヴィア民族の割合は53.7パーセントであり、首都リガだけで見れば40パーセントでしかない。1960年代にソ連邦内のラトヴィア民族は9000人増加したがラトヴィア共和国内での増加数は2000人だけである。ラトヴィアはバルト3国中最もロシア化が進んでおり、民族抵抗運動は比較的弱い。しかしバプティスト教会の活動家が逮捕されたり、G・オーウェルの小説「1984年」を運んだかどで活動家が4年のラーゲリ送りの宣告を受けたりしている。

□エストニア

ここ40年のソビエト政権下、エストニア共和国のエストニア民族は99万5000人から94万8000人へと減り、また民族構成でみても88.2パーセントから64.7パーセントへと減少した。首都タリンではすでにエストニア民族は過半数を切っている（1979年の公式統計では非エストニア民族が48.8パーセントだが、これには駐屯軍とその家族が含

信者の人権擁護委員会
中央スヴァリンスカス
その右タムケヴィチウス

まれていないので、実際には50パーセント以上が非エストニア系民族となる）。エストニア民族の存続自体が狙われている。こうしたソビエト化、ロシア化政策に対して、公然・地下の両形態で抵抗運動が行われている。公然活動はたとえば公開書簡、人権擁護活動などであり、地下運動では民族的または社会的目標を掲げた組織が作られている。

1983年、エストニア人10名、ラトヴィア人4名、リトワニア人4名からなるグループが「北欧非核地域に関する公開書簡」を発表、その中でバルト3国も非核地域に加えるよう提案した。だがこれに参加したエストニア人は全員、同年12月に“国有財産窃盗罪”で8年～12年の刑を宣告された。

1979年の「バルト・アピール」（モロトフ＝リッベントロップ条約は無効であると訴えたアピール）、アフガニスタン侵攻抗議声明その他の公開書簡の署名者であるE・タルトは1983年9月に逮捕され、翌年4月にラーゲリ10年流刑5年の判決を受けた。

1984年1月、亡命政府樹立を呼びかける「エストニア解放組織」のビラがエストニア共和国内で配布された。

□クリミア・タタール

1984年2月、父祖の地への帰還をめざすクリミア・タタール民族運動の指導者ムスタファ・ジェミーレフが3年の刑を宣告された。クリミア・タタールは対独協力の嫌疑をかけられて1944年5月にクリミア半島から中央アジアへ強制移住させられ、その移動の際に約半数が死亡した歴史を持っている。1967年に対独協力の疑いは晴れたが、クリミアへの帰還は許されず、非合法にクリミアに帰った1万2000人は流刑処分にあった。現在クリミア・タタールは約30万人いるとされている。

□ソ連のユダヤ人

現在ソ連邦内には約180万のユダヤ人が居住している（1959年には226万8000人いた）。彼らは何よりもイスラエル移住を求めて闘っている。ちなみに1983年に移住できたのは1315人だけであった。

□ソ連のドイツ人

ソ連邦内には約200万のドイツ系人がいるとされる。その大部分はエカチェリーナ2世時代にロシアに渡ってきたドイツ人の末裔で、長くヴォルガ河流域に居住していたが、スターリンの命令で中央アジアやシベリアに強制移住させられた。

ソ連邦内ドイツ人の闘いの目標は、西ドイツへの移住権の獲得である。現在までに約5万人が移住を認められたが、この問題に関し協力を要請しようとモスクワの西ドイツ大使館へ向かった活動家が逮捕されるなどの事件もしばしば起こっている。

□ソ連のポーランド人

1978年の公式統計によればソ連邦内に居住するポーランド系人は115万1000人である。ポーランド系人は少数民族の中でも自らの民族意識を急速に失っていく部類に入るとみえ、自分がポーランド民族に属しポーランド語が母国語であると意識している者は32.5パーセントにすぎない。

〔訳：高橋初子〕

国家廃絶への道——「連帯」が示すもの

井汲　卓一

ポーランド「連帯」の闘いがわれわれの胸底を深く打つものがあるのは、その闘いの根底にあるものが、われわれの当面している課題と直接に結びついているということによってである。それにもかかわらず人はともればとそのことを見のがし、あたかも、ポーランドの問題は、ソ連社会主義の支配のもとにその民族的独立と経済的発展の諸条件を奪われ、全体主義的圧制のもとに西欧的民主主義の自由と人権の世界から完全に遮断されている東欧社会主義諸国の苦悩の深さが抑えきれない声となってあふれ出たものとして受けとり、これに対する憤激と同情の思いを燃やすに専らであるかのように見える。だがもしそれに止まるならば、その憤激も同情も、あるいは、自分たちの世界の現実を美化するアヘンの幻覚作用に異ならないものになりかねない。われわれの世界、われわれの社会は、東欧諸国に比して一見はるかに甘美で自由な空気によっておおわれている。しかしその空気ももとはといえば同じ原料と同じ麻酔作用をもつ毒素からできていて、ただ片一方がはじめから毒毒しくて鼻もちがならぬ強い臭気で無遠慮にあらわれるのに対して、片一方が芳しい幻覚作用であらわれるにすぎないものであることは、米ソ両国が、同じような人間破壊の核兵器をもってそれぞれの世界を支配し、管理しながら、同じような行動様式をもって対立している姿を見るだけでも明らかである。ただ、一方のやり方がひどく野蛮で、固苦しく、変にしつっこいのに対して、もう一方のが都会的で、融通性があって、そのくせいけ図々しい、というくらいのちがいしかないが、しかしこっちの方が、いま中米で見るように、ずっといやらしくあこぎな場合の方もけっして少くないので、先般の大韓航空機の問題などは、実に暗澹なドス黒さがそこに感ぜられるのである。どっちにしても彼らは彼らの権力のために人類を弄んでいる。われわれはもしかするとポーランドにおけるよりももっと困難な状況に置かれているのかもしれないのである。しかしながらポーランドの問題は、そのことに思いを致すためにも再び重要なのである。

「連帯」の闘い

ポーランドの人たちは、彼らの置かれた歴史の経緯のなかで磨かれてきた英知によって敢然として、しかも最も慎重に、着実に彼らの道を進んだ。それは世界に深い同感をよび起しながら、急速に発展した。実をいえば、先見を誇るわけではないし、誰でも予想するところであったと思うが、彼らの進撃が必ず権力的体制側の反撃をよび起こすだろうということをわたしも予想した。

さすがに彼らの進撃は、打つべき手を打ちながら、きわめて慎重であり、見事であった。そしてまさにそれこそが反撃を阻止する第一の方法であった。だがやはり反撃をまぬかれることはできなかった。反撃は来た。その強力な、十分慎重に準備され、巨大な権力に背後から守られた反撃に面したとき、やはりかれらの混乱はまぬかれなかったようである。そこにはやはり、進撃の成功にやや前のめりになっていたために生じた油断があり、その隙に乗ぜられたものがあったようにおもわれるものがある。

だが混乱はむしろ最少限にくいとめられたように私にはおもわれる。そして一定の後方まで退いた後の陣形は、むしろ見事であった。そこには、われわれの持たないような後方があった。それは彼らの幾度かの闘争の成功と失敗の辛苦にみちた歴史によって生み出された、まだ全く未成熟ではあるが、しかし同時にあるはっきりした理念によって照らし出された未来、未来の胎児であった。それはすでに「連帯」の公然たる

活動のなかで最初の地ならしをされ、建設されはじめられていた、あるいは足場を組みはじめられていた社会、自主管理の「独立社会」の輪郭であった。それはまだそこにゆっくり住めるようにはなっていない。しかし最初の鍬はいれられていたのである。

彼らは直ぐに、そこに縦深のある塹壕を掘りはじめた。それが「連帯」の地下組織である。その地下活動の主目的とされたものは、公然活動と結びつきながら、最初からめざしていた自主管理の独立社会への営為である。それはこれからの長い歴史のなかでつくりあげられていくものであって、一朝の蜂起やストライキによって獲得される国家権力の如きものではないし、そうした権力によってつくりあげられる社会でもないのである。そしてそれこそは、われわれの、日本人であるわれわれをもふくめたわれわれの新しい世界構築の根本理念である。そういっては言いすぎとすれば、少くともわたしのポーランド「連帯」に動かされる深い共感なのである。

マルクスと国家の廃絶

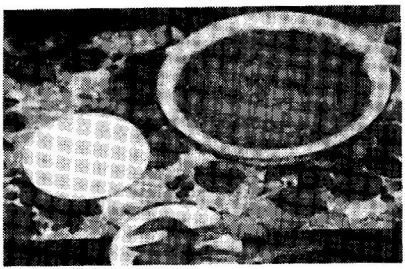
国家権力から自由な「独立社会」。これこそ実は、本来、かのマルクスが目ざしたところのものではなかったのだろうか？　マルクスはもともと、今日のこのような国家を廃絶し、そして今日の「連帯」がめざすような、そのような「独立社会」、自らの権力を国家なるものに疎外しない、自己権力としての社会をこそ彼は求めたはずである。わたしが今日なおマルクスに傾倒する所以である。しかしながらわたくしのどうしても納得できない彼の最大の誤謬は、この社会を、まさにこの国家権力――プロレタリアートの独裁なる国家権力――の樹立によって獲得できると考えこんだことである。ここに彼の「弁証法的誤謬」がある。実は弁証法なるものは、それ自身によっては何ものをも証明しないのではないのか。なぜなら、それはすべてを証明しうるから。歴史は、それが誤謬であっても、例えばスターリンの誤謬であっても、一度歴史の中に打ち込まれたならば、それ自身の弁証法をもって発展する。今日のソ連権力の在り方は、必ずしもスターリンの誤謬によって生み出されたものではないだろう。そもそも権力によって権力を廃絶しうると考えたマルクスの誤謬を、レーニンの天才的革命家としての力によって、グラムシのいわゆる「資本論に反する革命」として実現しえたからである。そしてそのことの意義をグラムシは高く評価したのである。しかしそれによって国家の廃絶は実現されえなかった。逆にスターリンによって途方もなく強大化された。これを一概にスターリンの誤謬とのみいうことはできない。

もっとも、それだからといって、今日のソ連国家を民主的なものとすることの意味までも否定しようとするものではない。しかしまたそれだからといって、その民主化された国家によって国家の廃絶が実現されるわけのものでもない。国家の廃絶は、ただ、その闘いのなかで対抗的に生み出されていく自主管理社会の形成を通じてのみ、独自的につくり出されてゆくのであり、その社会の発展のなかでのみ国家は廃絶され、死滅してゆくのであろう。権力国家はただ権力国家を媒介的に発展させることができるだけである。レーニンの権力国家が良い権力国家であったにしても、それがスターリン的な悪い権力国家を生む媒介項であることを妨げない。スターリン的な悪い権力国家をレーニン的な良い権力国家にすることもできるだろう。しかしそれによって国家権力が廃絶されるわけではない。これに対抗しつつ独自に、はじめから権力に無縁な社会が形成されなければならない。そのことをポーランドの「連帯」は教えているのだとわたしはうけとっている。スターリンとの闘いのなかで、ユーゴの自主管理社会主義国家の理念が生まれたのであるが、それをうけつぎながら、しかしさらにマルクス主義、遡ってマルクスへの批判のなかから、「連帯」の自主管理社会の理念が生まれたのだということを、そしてそれは「KOR」の思想家たちの大きな歴史的な寄与でなかったのかと、わたしはおもうのである。　【標題と中見出しは編集部】

作ってみませんか ポーランド料理

ビゴス

食は文化なり――などと大上段に振りかぶるわけではありません。ただ、冬の夜ながら、ポーランド料理をつつきながらかの国に思いをはせるのも悪くないではありませんか。というわけで、ポーランド滞在の長かった工藤久代さんに代表的ポーランド料理を教えていただくことにしました。今回は、ポーランド独特の家庭料理ビゴスの作り方。ただ煮込むだけ、時間は少々かかりますが手間はかからないお料理です。



材料（4～8人前）

サワークラウト（塩漬け発酵キャベツ。缶詰やびん詰で売られています）　600～700g
生キャベツ　600～700g
牛すね肉（骨つき）　500g
ベーコン　100g
しめじ　1パック（100g位）
固形スープの素　3個
月桂樹の葉　2枚
粒コショウ　10粒位
豆板醤　小さじ半分
（好みにより）レーズン　15g位

作り方

①生キャベツを3ミリ幅位のせん切りにする。しめじの根元の部分を取り除き、バラバラにほぐす。ベーコンは1～2センチ幅に切る。
②厚手の大きな鍋でベーコンを軽くいため、次いで生キャベツを入れていためる。キャベツに油がまわったらサワークラウトを漬汁ごと入れ、水3カップをさし、固形スープの素を放り込む。煮立ったら牛すね肉（かたまりのまま）、しめじ、スパイスを入れて1時間位中火で煮る。（煮汁がなくなりかけたら水をさす。）
③火をとめて2時間位おいて味をなじませる。
④再び適宜水を足して中火にかけ、1時間煮て2時間さます。これを4～5回繰り返すうちに牛肉が柔らかくなるので、しゃもじか木じゃくしで肉をバラバラにほぐす。骨の髄もとけてくずれる。
⑤べっこう色になったら骨を取り除く。味をみて塩気が足りないようなら塩を少し足す。好みによりレーズンを入れる。

ビゴスというのはごった煮で、本来は幾種類かの残りソーセージやくず肉をキャベツと煮込む、いってみれば残り物お片付け料理なのです。でも日本のソーセージは甘味料入りで、ビゴスに入れると出来上がりが甘くなるので、私は牛すね肉を使います。豚の余り肉やコマ切れ肉を小さく切って加えても良いですよ。私は普段レーズンも入れないのですが、甘い方をお好みの方はお入れになるとほのかな自然の甘味がつきます。最初に水3カップ入れるとしましたが、そのうち1カップ程度を白ワインにかえてもかまいません。

日本のおでんと同じで、煮込むほどおいしくなります。ポーランドの家庭では多めに仕込んで何日もかけて煮て食べるのです。家庭ごとに独自の味があると言います。ビゴスはポーランドでは冬の夕食によく食べますね〔ポーランドでは昼食（オビアド）が正餐〕。これだけでは主菜になりにくいですが、他の料理ととりあわせておおぜいでお酒でも飲みながらおしゃべりする席に出すとよく似合います。

ポーランド日誌
1984年10月5日～31日

10月5日　キシチャク内相、警察・治安機関40周年式典で演説、1980年代の初めポーランドは社会主義解体の危機にさらされたが、戒厳令によりこのもくろみは粉砕されたと語る。

10月6日　ポーランド人4人が漁船でスウェーデンに亡命。ワルシャワ警察を訪問したヤルゼルスキ首相、法の支配に従った職務遂行の必要性を強調。

10月8日　「連帯」非合法化2周年のこの日、ワレサ委員長は声明を発表、労働組合の自由の回復を求める。政府系紙によれば新労組は460万人に。

10月9日　ウルバン政府スポークスマン、J・ビニオルとP・ベドナシの2人が公金（「連帯」組合費）の返還を求めてヴロツワフ地裁に告訴されたことを明らかにする。2人は地区「連帯」責任者として1981年12月3日、銀行から組合費8000万ズウォティを引き出し、これをその後の活動費にあてていた。

10月10日　ワレサ委員長、ビニオルとベドナシは正当に組合費を使用したと反論。英国外務省、リフカインド国務相が11月4日からポーランドを訪問すると発表。

10月11日　西ドイツのゲンシャー外相のポーランド訪問（11月22、23日）が正式に発表される。

10月12日　グダンスクのブリギッダ教会で政治囚の釈放を求めて5人の「連帯」活動家が断食と祈祷に入る。

10月13日　ワレサ委員長、S・ヤヴォルスキ、A・スウォヴィク、Z・ロマシェフスキ、H・ヴエツらと政治囚釈放闘争の進め方について協議。ブリギッダ教会の断食と祈祷に新たに35名が参加したという。数百名が参加との報も。ノヴァフタでは2年前に警察に射殺された青年の追悼ミサに4000人が参加。一部が射殺現場に赴き、花輪を捧げる。

10月14日　ワレサ委員長、イタリアのANSA通信とインタビュー、西側の対ポーランド経済援助は組合複数制に基いた真の経済・社会改革に向けられるべきだと語る。「近く完全な社会経済プログラムが発表され、公然たる抗議や街頭デモは放棄されよう」。

10月16日　ワルシャワのラコヴィエツカ監獄に拘留中のB・リスが胃潰瘍を悪化させていると伝えられる。この日の軍機関紙『ジョウニエシ・ヴォルノシチ』は、L・コワコフスキ、S・アムステルダムスキ、A・ミフニク、J・クーロン、ズジスワフ・ルラシュ、L・ワレサ、J・J・リプスキらの名前をあげて「反ポーランド十字軍」に参加と激しい非難。ワレサ委員長、今年のノーベル平和賞を受賞した南アのツツ司教を称讃する声明を発表。

10月18日　オーストリアのグラッツ外相、3日間にわたるポーランド公式訪問を終え帰国。

10月19日　夜、スタニスワフ教会のイエジ・ポピエウシコ神父が誘拐される（以下、事件関係日誌は2頁）。ワレサ委員長、政府に対し組合複数制の是非を国民投票にかけるよう要求する。

10月21日　「連帯」関係者の誠実な弁護で信望の厚かったワルシャワの弁護士、ヤツェク・ヴジニアク氏がガンのため死去。41歳。

10月22日　ワレサ委員長が暫定調整委員会と協議。ポピエウシコ神父事件に関し声明（本誌5頁）。これまでの「連帯」構造の堅持と強化、ポーランド内外における組合活動の方向についても討議されたという。政府機関紙『ジェチポスポリタ』、ILOがさたる11月13日の理事会でそのポーランド問題特別報告書（本誌84年8／9月号に要旨）を正式採択すれば、ポーランドはILOから脱退すると報じる。ギリシアのパパンドレウ首相がポーランドを公式訪問。西側首相としては戒厳令後はじめて。23日に帰国。

10月24日　グダンスクでピョトル・Pなる警官が「非合法地下組織との協力」で逮捕されたという。

10月25日　官製鉱山労組がスト中の英国炭鉱労組のスカーギル委員長に手紙を送り、鉱夫の子供たち100人を年末までにポーランドに招待したいと提案。

10月26日　国営通信インタープレス、ILOとその特別報告書を非難。

10月29日　フィンランドのヴェイリネン外相がポーランド訪問。ヤルゼルスキ首相らと会談して31日帰国。

10月30日　ワルシャワ地下「連帯」指導者K・ビェリンスキ、Z・ヤナス、W・クレルスキが連名でサハロフ博士夫妻にあてた支援と連帯の声明を発表。

10月31日　8月末に再逮捕、投獄されていたW・フラシニュクとJ・ビニオルが刑期満了で釈放の報。

〔編：水谷　驍〕

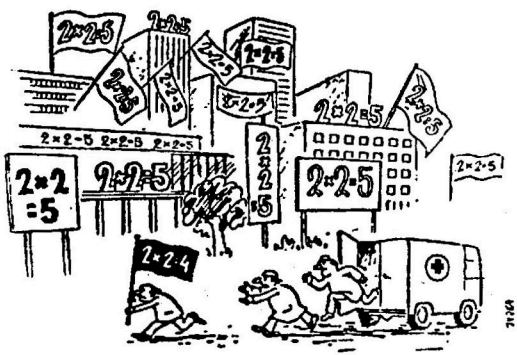
編集後記

☆国民の90%以上がカトリックといわれる国で神父が誘拐、殺害されるという奇怪な事件。これを契機にヤルゼルスキが内務省を直轄下に置いて、これで事件は幕、の観。真相はどこに？

☆早くも12月。次号、1／2月合併号は12月末刊の予定。会費、定期購読料の納入をよろしく。み

ポーランド月報一九八四年十一月号（通巻33号）
一九八四年十二月五日発行（毎月一回五日発行）
一九八四年二月十日第三種郵便物認可

ユーモア館



'84年秋期開講!!
マヤコフスキー学院

ロシア語

コース	開講	曜日	講師
文芸・読物基礎コース	10/29	月	谷垣恵子 桑野隆
中級読物コース	10/30	火	坂本博 浦雅春
ドストエフスキー	11/2	金	江川卓 鴻英良
プーシキン	10/29	月	水野忠夫 長縄光男

ポーランド語

コース	開講	曜日	講師
会話コース	10/30	火	米川ブランカ
初級	11/2	金	進藤照光
中級	11/2	金	小原雅俊 石井哲士朗
作品講読	11/1	木	工藤幸雄 武井摩利 篠崎誠一

●授業開始／10月29日～11月2日　●期間／6ヵ月
●時間／PM6：30～9：00（会話コースのみ6：30～8：30）
●授業料／入学申込金5,000円ロシア語25,000　ポーランド語30,000円（会話コースのみ40,000円）
●問合せ／中野区東中野1－41－5 TEL 362－8772　マヤコフスキー学院

発行所・ポーランド資料センター　〒101 東京都千代田区三崎町2－10－5 一国ビル3F
電話 03－261－2585　郵便振替 東京 2－81069
Center for Polish Research　%Kazukuni Bldg. 3F 2－10－5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101
定価400円・年間定期購読料4600円（送料共）